

木村英一著 『孔子と論語』

海老田, 輝巳
北九州工業高等専門学校

<https://doi.org/10.15017/18046>

出版情報：中国哲学論集. 3, pp.56-62, 1977-10-01. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：



書評

木村英一著『孔子と論語』

海老田 輝 巳

『孔子』の思想及び人間についての研究や『論語』の原典についての研究は、すでに先学によって数多の著書が公にされている。これらの著書には、それぞれの特徴があつて中国古代研究の分野に従事する者はもちろんのこと、凡そ東洋の學術に関心する者のすべてに数知れぬ恩恵を与えている。論語や孔子の研究者は、論語の原典批判に正面から取り組んで業績を挙げた武内義雄博士・津田左右吉博士・宮崎市定博士等、論語という書物そのものに対するよりもむしろ孔子の思想や人間の研究に従事して原典批判を副次的なものとしている貝塚茂樹博士・白川静博士等の二つの部類に大別されるであらう。

然るに木村英一博士は、孔子の人間そのものと論語の原典そのものとをあるがままに捉えようとされる。『孔子と論語』の書がこれであり、この書の最大の特徴も意義もまたここにある。

さて本書の構成は次の通りである。

自序

序説

第一篇 孔子の伝記について

第一章 孔子の家系・出生・幼少年時代

第二章 孔子の青年時代について

第三章 孔子の職歴について

第四章 孔子の天下遊説について

第五章 孔子の晩年とその事業

第一節 晩年の孔子

第二節 孔子の学校について

附録 孔子以前の学校について

第二篇 論語の成立

第一章 論語の成立についての序説

第二章 齊魯の記録と三論

第三章 章群と章群連関

第四章 論語二十篇の構成

第一節 学而篇の性格と構造

第二節 為政篇の性格と構造

第三節 八佾篇の性格と構造

第四節 里仁篇の性格と構造

第五節 公冶長篇の性格と構造

第六節 雍也篇の性格と構造

第七節 述而篇の性格と構造

第八節 泰伯篇の性格と構造

第九節 子罕篇の性格と構造

第十節 郷党篇の性格と構造

第十一節 先進篇の性格と構造

第十二節 顔淵篇の性格と構造

第十三節 子路篇の性格と構造

- 第十四節 憲問篇の性格と構造
- 第十五節 衛靈公篇の性格と構造
- 第十六節 季氏篇の性格と構造
- 第十七節 陽貨篇の性格と構造
- 第十八節 微子篇の性格と構造
- 第十九節 子張篇の性格と構造
- 第二十節 堯曰篇の性格と構造
- 第五章 論語の編輯について

本書が最初に発行されたのは昭和四十六年であり、本書はそれ以前に学会誌で発表された諸論文を一つに纏めたもの、いわば論文集である。たとえば第一篇第四章は昭和四十一年の「日本中国学会報十八」に、第二篇第四章第一節は昭和四十二年の「日本中国学会報十九」に発表されたものである。本書では、論文集にありがちな章構成のとりつきにくさや論旨の繰り返しが感じられない。それは著者が長年に亘って広い見通し・展望をもって継起的に研究・発表されたことによるものであろう。したがって本書は前に挙げたように自序・序説・第一篇・第二篇から成り、各篇は章・節とに分けられていて、四八四ページ（自序を除く）から成る浩瀚な著書にもかかわらず、最初から最後まで読み通さねばならない。最後に索引があっても、それを利用して必要な項目について検討したり、あるいは拾い読みをすることは無益に近い。因みに一例を挙示してみよう。△第二篇 第二章 齊魯の記録と三論▽の「一つの論語がほぼ形成されたのは、先秦末であったか、もしくは漢初であったかは疑問としても、その一つの論語、従って漢代の三論のどれにも、もと斉から出た記録とも魯から出た記録とが集められて混在していた……云々」（一九九頁）の内容は、△第二篇 第三章 章群と章群連関▽の「今本論語は、漢代の古論・斉論・魯論という三論の折衷であるが、三論自体がいずれも、既に先秦時代に魯で成立した記録と斉で成立した記録とを合わせてできたものであった。」（二二八頁）の内容と関連している。またこの二二八頁の部分は、第二篇第三章の纏めであると同時に、第二篇第二

章の内容をふまえて論語の成立を具体的に示している。

そして本書における著者の姿勢は、「決して儒教に対する護教的な立場からでもなく、また反儒教的な先入主見に立つものでもない。在るがままの真相を明らかにして、孔子を正しく位置づけてみたいのである。」（自序 一頁）「歴史的存在としての人物の価値づけと、文化遺産としての事業や業績の価値づけとが、正されなければなるまい。孔子という人物と論語という書物との、価値的存在としての事実の真相が果たしてどんなものであるのだろうか、これが私の研究の課題である。」（自序 五―六頁）に示されているように、孔子を周の封建制崩壊の時代における一個人として捉え、孔子にかかわる史料を精密に分析活用しながら克明に人間像を追求しつつ、同時に論語に対してもただ所与の文献として解釈するに止まらず、関連の深い史料の適切か否かの検討をもおしすすめている。

以上ごく大まかに本書の特徴を概述したが、以下紙面の許す限り各篇の簡単な紹介と論及の特徴及び疑問点について述べることにしたい。

△第一篇 孔子の伝記について▽この篇は先に挙げたように五章から成っている。まず各章に共通している点は、著者が孔子に関する史料を存分に駆使している点にある。「史記」孔子世家はもちろんのこと、「春秋左伝」・「世本」その他の史料を検討した結果、記載年次のずれを見出し、何れの史料が適正であるかを明確にしている。（十九頁・七九頁・八七頁等を参照）次に孔子が周の封建制の維持に専念した人であって、教育上古典の「詩」「書」「礼楽」の教えがいかに必要であったかを如実に論及している。（一二七頁・一五五―一六〇頁参照）教育が士大夫の子弟に限られていたことは、身分社会によるものであることはいうまでもない。著者は、孔子の時代背景・社会構造を克明に検討している。（三二頁・一二四頁―一二七頁）このような著者の姿勢は、先に挙示した「決して儒教に対する護教的な立場からでもなく、また反儒教的な先入主見に立つものでもない。」（自序 一頁）に合致すると思われる。

△第二篇 論語の成立▽この篇は五章から成るが、中でも第四章は、「論語」各篇の性格・構造について詳述している。本書の大部分を占めている。第一章は、論語の成立について従来の論及不十分な点を解明したもの。著者によれば、現在の論語が「史記」孔子世家等の孔子と門弟子の言行記録がほとんど一致していることから、史記の成立時には、

すでに現在の論語が存在していたことが察知できる。さらに具体的な方法として、「A 篇目と章次とを手がかりとして編纂経路を追求するみち B 先学の達見について C 史料としての批判の一つの手がかり D 伝誦の所産である点に注意すること」(一七一頁―一九二頁)の四点をあげている。Aの方法について若干の疑問があるが、第三章・第四章、特に第四章と関連が深いので、後に述べる。Bの方法については、著者は特に武内義雄博士と津田左右吉博士の両説を批判検討しつつそれを克服しようとする意図が伺える。津田博士の「論語と孔子の思想」では、論語四九九章の大部分は孟子の時代以後に付加されてきたもので、ほとんどが孔子のことばがそのまま伝えられたものではなく、各章は何等の連関がないということになっている。このような方法に立脚すれば、すべての古典の存在は不可能になる。津田博士を批判して、論語の自律的な面を指摘する著者の論及には首肯できる。さて、武内博士が伊藤仁斎・崔述の両説によって論語各篇の成立を示した「論語之研究」に対して、著者は、「何ぶん確たる証拠のないところを微妙な文辞の鑿定に基づいて立論された説であるから、種々の点に異論の生じることが免れ得まい。」(一七八頁)と述べ、さらに「毎篇Aに述べた如き複雑な痕跡があることを考え合わせるならば、仁斎説・崔述説、若しくは両者の総合の上に立つ武内説だけでは直ちに結論に達することは出来ないであろう。……しかしともかく精読の余に得られたすぐれた見識があつて、いずれも尊重すべき要素を多分に含んでいる。」(同頁)と結んでいる。ここに述べている「異論の生じる」の「異論」とはいかなるものであろうか。また「毎篇Aに述べた如き複雑な痕跡」によって「武内説」をどのように著者は超克しているのであろうか。筆者が本書を読む限り見出し得ないのである。これ等について、もっと具体的に論証されることが必要ではあるまいか。

第二章は、論語が書物として形成された経緯について述べたもの。それは先秦末か、漢代の何れかであらうが、齊から出た記録と、魯から出た記録(著者は魯に伝わった一形態である「古論語」も含めている)とが集められて現在の論語が成立したものであるとして、孔子より孟子・荀子に至る人々と齊との関係、孔子の門弟子で魯に止まって儒学を伝えた人々の事情について詳述している。

第三章は、章群と章群連関について述べたもの。これは第一章の「A 篇目と章次とを手がかりとして編纂系路を追求するみち」の内容をふまえ、章連関方式として、①並列方式 ②連鎖方式 ③集中方式 ④対応方式 ⑤付録方

式（二一九頁―二二八頁）の五つの方式を詳述している。この五つの方式は、第四章の論語二十篇の各篇の性格と構造において具体化しているので、次章で取り挙げることにする。

第四章は前述したように量的にも本書の大部分を占めるものであるが、内容的にも本書の中核を形成するものである。論語の章群の関連について、綿密に検討把握して篇の特徴を示した武内義雄博士の「論語之研究」の中に、河間七篇本一為政篇より泰伯篇までの七章一の各篇には、それぞれに思想内容の纏まったものがあること、また加藤常賢博士の「中国原始觀念の発達」の中に、八佾篇は國家の規範としての礼について、郷党篇は道德としての儀礼について述べたものであること、のすでに指摘がある。部分的にはこうした明快にしてかつ卓絶した研究の成果が、先学の手によって残されているが、論語二十篇の全体について各篇ごとに詳細な検討による各章の思想内容及び表現形式の上から各章ごとの連関、章群相互の連関、章と章群との連関を通して論語各篇の成立事情にまで考察の及んだものは、本書以前に見出すことはできない。本書の業績の最たるものであろう。さて、首章である学而篇第一章と、末章である堯曰篇第三章の関連については、「人不知而不愠。不亦君子乎。」（学而篇）と「不知命、無以為君子也。」（堯曰篇）の部分をつまえて「君子の学の大様を説明したことになる。」（四六四頁）と述べている。この事は、論語は君子の学、「己を修め人を治める学であり、道德と政治を一貫した立場に立つ君子の正しい生き方の追求」（四九頁）という点とかかわり、まさに論語二十篇の首尾が、君子の学であり君子の書であることを、首肯せしめる。しかし、各篇ごとについては、すべての篇が必ずしも首尾一貫しているとはいえないように思う。著者は、先に挙示した並列・連鎖・集中・対応・付録の五つの方式によって各章・各章群が有機的に連関していることを論述しているが、付録方式を除く四方式は、それぞれ一個の連関方式にせよ、付録方式とは、連関上いかなる意義を有するのであろうか。この点疑問が残る。また付録方式とする事についても、たとえば為政篇二十四章中、第二十二章より第二十四章までの三章は、第二十二章は「信」についての章、あとの二章は「礼」に関する章で、信については、著者は二六七頁において陽貨篇・堯曰篇等の例文を引用して、信が政治における重要条件の一つであるとし、「礼」については、二六八頁で礼は國家の制度であることを論述してい、「信」や「礼」がほんらい政治と関係が深いのに、あえてここで付録方式にしているのはいかなる理由によるのであろうか。雍也篇では、前半十四章中、第十三章と第十四章は、前者

が魯の大夫孟之反の逸話について述べた孔子のことは、後半が祝鮀と宋朝を思い浮かべつつ世状の厳しさを述べた孔子のことで、前十二章の孔子晩年の師弟問答や弟子への教訓のことはと内容を異にしている。この場合に、著者は「本体は1〜12で、13・14の二章はそれの附録と見られる。」（三〇六頁）としている。何故に別個の内容の章群が他の章や章群に付加しているのか。このような筆者の方法は、子路篇や季氏篇にも見出せる。極言するならば、連関しない章や章群を、付録方式とした場合は、いかなる場合にも連関しえよう。何故に付加できるのか、そしてこれ等の連関しえないものは、いかなる役割を占めるかといった論及がなお必要なのではあるまいか。

第五章は、論語の編輯について述べたもので、二十篇のそれぞれの要点を纏め、現行の論語成立以前の三論と上論・下論の各十篇との関連について詳述している。

最初に述べたように、本書の発行されるまで、孔子そのものと論語の文献の詳細な検討との両者について纏められたものはなかった。この意味で画期的でもありしかも斯界に裨益することの頗る大きい本書に対して、筆者の浅学非才の故に、正しい理解や妥当な評価をなしえなかったのではあるまいかと危惧するものである。著者の御寛恕を切にお願い致す次第である。

昭和四十六年二月発行・本文四八四頁

（他に自序六頁・索引十六頁）創文社 定

価五千円

（付記）なお最近、著者によって「論語」全文の訳注本が発行された。末尾の解説には、論語の思想が詳細に述べられていて、したがって本書を読むのにも好都合であるので紹介しておく。

『論語』文庫本 昭和五十年八月、講談

社発行、六一六頁 定価四八〇円